

ウズベク語の他動性

日高 晋介

1. はじめに

庄垣内(1988: 829)によれば, ウズベク語はチュルク語の一種であり, 主にウズベキスタン共和国内で話される. 話者数は約1660万人であり, 東方またはチャガタイと呼ばれる言語グループに属する. 1940年にキリル文字正書法が制定された. 母音調和は行われない. 1993年に新ラテン文字正書法が制定された(Boeschoten 1998: 357-8). 本稿では, ラテン文字正書法を用いる.

次にウズベク語の名詞形態法と格体系について概略を述べる. 以下にウズベク語名詞形態法を挙げる.

名詞語幹—複数 (-lar) —所有人称—格

それぞれ表1と表2に, 所有人称接辞と格体系を挙げる.

表1: ウズベク語の所有人称接辞

	単数	複数
1人称	-(i)m	-(i)miz
2人称	-(i)ng	-(i)ngiz
3人称	-(s)i	

表2: ウズベク語の格体系

	形式
主格	なし
対格	-ni
属格	-ning
与格	-ga
処格	-da
奪格	-dan

各形式に関する特筆すべき特徴を以下に挙げる.

対格: Sjoberg(1963: 84)では, 接続する名詞句が定(definite)の場合-niが付され, 不定の場合格接辞は付かないとしている. Boeschoten(1998: 360)では, -niは特定の(specific)直接目的語を標示するとされている.

属格: 口語で/-ni/と発音される場合がある(Sjoberg 1963: 84, Boeschoten 1998:

360).

与格： Sjoberg(1963: 84)によると、無声子音の後で、/-ka/となり、/q/, /x/, /ɣ/の後で、/-qa/となる。

さらに Sjoberg(1963: 50)によると、語末に形態音素 /ǧ/を持つ語に/G/で始まる接辞（ここでは与格接辞）が付された場合、語と接辞両方に異形態音素/q/が現れる（例: /tǧ/ 「山」 + /-ga/ > /tǧqa/ 「山に」）

処格・奪格： Sjoberg(1963: 84)によると、三人称所有人称接辞 -(s)i や、指示代名詞 *bu*, *shu*, *u* に接続する場合、それぞれ-*nda*, -*ndan* として実現する場合がある、としている。

なお、本稿では主格と不定対格にはグロスを付さないことに注意されたい。

2. データ

以下の用例は、コンサルタントが日本語を読んでその後にウズベク語で発話したものを録音し、筆者が書き起こしたものである。このデータの提供者は Khikmatullaev Jasur 氏（1984 年生、タシケント出身）である。

なお、本稿における誤りはすべて筆者の責任である。【 】の内の用語は本特集の「まえがき」で挙げられている用語である。

【直接影響・変化】

(1) a. 彼はそのハエを殺した。

U ana u pashsha-ni o'ldir-di-φ
3SG there that fly-ACC kill-PAST-3SG

b. 彼はその箱を壊した。

U ana u quti-ni buz-di-φ.
3SG there that box-ACC break-PAST-3SG

c. 彼はそのスープを温めた。

U sho'rva-ni isit-di-φ.
3SG soup-ACC warm-PAST-3SG

- d. 彼はそのハエを殺したが、死ななかつた。

U ana u pashsha-ni o'ldir-di-φ, lekin pashsha o'l-ma-di-φ.
 3SG there that fly-ACC kill-PAST-3SG but fly die-NEG-PAST-3SG

【直接影響・無変化】

- (2) a. 彼はそのボールを蹴った。

U ana u to'p-ni tep-di-φ.
 3SG there that ball-ACC kick-PAST-3SG

- b. 彼女は彼の足を蹴った。

U qiz u-ning oyog'-i-ga tep-di-φ.
 that daughter 3SG-GEN leg-3SG.POSS-DAT kick-PAST-3SG

- c. 彼はその人にぶつかった (故意に)。

U ana u odam-ga ur-il-di-φ.
 that there that person-DAT hit-PASS-PAST-3SG

- d. 彼はその人にぶつかった (うっかり)。

U ana u odam-ga ur-il-ib ket-di-φ.
 that there that person-DAT hit-PASS-CVB leave-PAST-3SG

対象に直接影響が及ぶ場合、基本的には動作主 (Agent) に主格、対象に対格あるいは与格が付される。(2b)は、特殊な状況では対格も許容される。例えば、彼が死んでいて「彼の足」が身体から切り離されていれば対格が用いられる、というコンサルタントからの指摘を得た。

ぶつかる「意志」があれば(2c)のように補助動詞なしで、「意志」がなければ(2d)のように補助動詞 (*ket-*) で文が形成される。*ket-*は本動詞としては「去る、行く」という意味を持つ。Ibrahim(1995: 161-168)では、*ket-*の補助動詞としての用法が7つ挙げられている。(2d)の *ket-*は、動作が突然起こることを表す用法 (Ibrahim 1995: 165) に該当する。

【知覚 2A vs. 2B】

- (3) a. あそこに人が数人見える。 / I see some people there.

Ana u yer-da bir nechta odam-lar ko'r-in-yap-ti.
 there that place-LOC one one person-PL show-PASS-PROG-3SG

b. 彼はその家を見た.

U {ana u/ osha} uy-ni ko'r-di-φ.

3SG there that that house-ACC see-PAST-3SG

c. 誰かが叫んだのが聞こえた. / I heard somebody cry out.

Kimdir baqir-gan-i eshit-il-di-φ.

who yell-PTCP.PAST-3sg hear-PASS-PAST-3SG

d. 彼はその音を聞いた.

U osha tovush-ni eshit-di-φ.

3SG that sound-ACC listen-PAST-3SG

(3a)と(3c)の自動詞 *ko'rin-*, *eshitil-*は, (3b)と(3c)の他動詞 *ko'r-*, *eshit-*に自動詞化接辞 *-in*, *-il* が付いて形成されたものである. 角田(1991: 103-104)は *see*, *hear* は *look*, *listen* よりも対象に及ぶ度合いが高い, つまり他動性が高いとされている. しかし, ウズベク語では自動詞文として(3a)と(3c)が実現しているため, 角田(1991: 103-104)の反例となりうる. これに関しては3節で再検討する.

【(知覚 2A) 発見・獲得・生産など】

(4) a. 彼は (なくした) 鍵を見つけた.

U kalit-ni top-di-φ.

3SG key-ACC find-PAST-3SG

b. 彼は椅子を作った.

U stul(-ni) yasa-di-φ.

3SG chair-ACC make-PAST-3SG

この場合, 動作主に主格, 対象に対格が付される. コンサルタントによれば, 対格付加の条件は目的語に対する動作目的の有無によると言う.

(4a)はなくした鍵を見つけようとしているため, 対格が付される. 逆に, 道端でたまたま鍵を見つけたような時には対格は付されない. (5a)でも同じことが言える. しかし, (5a)だけでは目的があって作ろうとしたのか目的なしに作ろうとしたのかがわからないために, 対格に括弧が付されている.

【追及】

- (5) a. 彼はバスを待っている.

U avtobus(-ni) kut-yap-ti.

3SG bus-ACC wait-PROG-3SG

- b. 私は彼が来るのを待っていた.

Men u kel-ish-i-ni kut-ayotgan edi-m

1SG 3SG come-VN-3SG.POSS-ACC wait-PTCP.PRS COP.PAST-1SG

- c. 彼は財布を探している.

U {karmon/koshelyok}-ni qidir-yap-ti.

3SG wallet-ACC search-PROG-3SG

述部が「追及」を表す場合も、動作主に主格、対象に対格が付される。この場合も(4)と同じで目的の有無によって対格が付くか付かないかが決まる。

コンサルタントによれば、(5a)の場合、決まった目的地があるならば対格が付されるが、単にどこかに行きたい場合は付されない。(5b)は「彼が来るのを待つ」という目的があるため、対格が付されなければならないとの指摘を得た。(5c)もなくした財布を見つけるという目的が読み取れるため、対格が付される。対格なしの場合は、財布を買うために探していることになる、との指摘を得た。

【知識 1】

- (6) a. 彼はいろいろなことをよく知っている.

U har xil narsa-lar-ni bil-a-di.

3SG all kind thing-PL-ACC know-NPST-3SG

- b. 私はあの人を知っている.

Men u odam-ni tani-y-man.

1SG that person-ACC know-NPST-1SG

- c. 彼にはドイツ語がわかる.

U nemis til-i-ni tushun-a-di.

3SG German language-3SG.POSS-ACC understand-NPST-3SG

【知識 2】

- (7) a. あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

Men kecha ayt-gan gap es-ingiz-da=mi?
1SG yesterday say-PTCP.PAST talk memory-2SG.POSS-LOC=Q

- b. 私は彼の電話番号を忘れてしまった。

Men u-ning telehon raqam-i-ni {es-im-dan chiqar-ib
1SG 3SG-GEN telephon number-3SG.POSS-ACC memory-1SG.POSS-ABL go.out-CVB
qo'y/ unut}-di-m.
put forget-PAST-1SG

述部が「知識」を表す場合も、動作主に主格、対象に対格が付される。ただし、(7a)は名詞述語文となっている。(7a)のウズベク語文は直訳すると「私が昨日言った話はあなたの記憶にありますか」という意味である。

【感情 1】

- (8) a. 母は子供たちを深く愛していた。

Ona bola-lar-ni juda=ham sev-ar edi-ø
mother child-PL-ACC very=also love-PTCP.FUT COP.PAST-3SG

- b. 私はバナナが好きだ。

Men banan-ni yaxshi ko'r-a-man.
1SG banana-ACC good see-NPST-1SG

- c. 私はあの人が嫌いだ。

Men ana u odam-ni yomon ko'r-a-man.
1SG there that person-ACC bad see-PAST-1SG

【感情 2】

- (9) a. 私は靴が欲しい。

Men {tufli/ oyoq kiyim} xohla-y-man
1SG shoe leg clothes want-NPST-1SG

- b. 今、彼にはお金が要る.

Hozir un-ga pul kerak.
 now 3SG-DAT money necessary

(9a)では、対格が付されていない。これは特定のほしい靴が決まっておらず、単に靴というものがほしいということが読み取れるために、対格が付されない、との指摘を得た。反対に、ほしい靴が決まっていれば対格を付すことができるようだ。

(9b)では主体が与格、対象が主格で表され、述語に *kerak* が用いられている。

【感情 3】

- (10) a. (私の) 母は (私の) 弟がうそをついたのに怒っている。

Uka-m yolgo'n gap {ayt-gan-i-ga/ ayt-gan-i
 brother-1SG.POSS false talk say-PTCP.PAST-DAT say-PTCP.PAST-3SG.POSS
uchun} ona-m-ning jahl-i chiq-yap-ti
 for mother-1SG.POSS-GEN angry-3SG.POSS go.out-PROG-3SG

- b. 彼は犬が恐い。

U it-dan qo'rq-a-di.
 3SG dog-ABL fear-NPST-3SG

(10)は、(9)の場合とは異なる。(10a)は、直訳すれば「私の弟が嘘の話を言った {ことに/ため} 母の怒りが出ている。」となる。(10b)では、対象に奪格が付されている。

【関係 1】

- (11) a. 彼は父親に似ている。

U ota-si-ga o'xsha-y-di
 3SG father-3SG.POSS-DAT resemble-NPST-3SG

- b. 海水は塩分を含んでいる。

Dengiz suv-i-da tuz-lar bor.
 sea water-3SG.POSS salt-PL existence

【関係 2】

(12) a. 私の弟は医者だ.

Mening uka-m shifokor.
 1SG.GEN younger.broher-1SG.POSS doctor

b. 私の弟は医者になった.

Mening uka-m shifokor bo'l-di-φ.
 1SG.GEN younger.broher-1SG.POSS doctor become-PAST-3SG

(11a)では、主体に主格、対象に与格が付されている。(11b)は存在文で表されている。(12a)では、コンピュータを伴わず単に名詞が並列されているだけであるが、(12b)では *bo'l-*「なる」という動詞が必要とされる。ウズベク語ではこの場合 *shifokor*「医者」に格は付かない。

【能力 1】

(13) a. 彼は車の運転ができる.

i. *U mashina hayda-y ol-a-di.*
 3SG car drive-CVB take-NPST-3SG

ii. *U mashina hayda-sh-ni bil-a-di.*
 3SG car drive-VN-ACC know-NPST-3SG

b. 彼は泳げる.

i. *U suz-a ol-a-di.*
 3SG swim-CVB take-NPST-3SG

ii. *U suz-ish-ni bil-a-di.*
 3SG swim-VN-ACC know-NPST-3SG

【能力 2】

(14) a. 彼は話をするのが上手だ.

i. *U odama-lar bilan yaxshi gapirash-a-di.*
 3SG person-PL with good talk-NPST-3SG

ii. *U yaxshi suhbat qil-a ol-a-di.*
 3SG good conversation do-CVB take-NPST-3SG

b. 彼は走るのが苦手だ.

U uncha yaxshi yugur-a ol-ma-y-di.

3SG so.much good run-CVB take-NEG-NPST-3SG

(13a)と(13b)では補助動詞 *ol-*を用いる表現 (13a.i., 13b.i.) と, *bil-*「知る」という動詞を用いる表現 (13a.ii., 13b.ii.) の二通りが可能である. 補助動詞 *ol-*を用いる方が一般的であると考えられる.

(14a)を直訳すれば「彼は人とうまく話す」「彼は {うまく/うまい} 話ができない」となる. (14b)でも, (13a.i.)と(13b.i.)と同様に補助動詞 *ol-*が用いられている.

【移動】

(15) a. 彼は学校に着いた.

U maktab-ga yet-ib {kel-/bor-}di-ø.

3SG school-DAT reach-CVB come/go-PAST-3SG

b. 彼は道を渡った/横切った.

U yo'l-dan o't-di-ø

3SG way-ABL pass-PAST-3SG

c. 彼はあの道を通った.

U ana u yo'l-dan {o't/yur-}di-ø

3SG there that way-ABL pass/move-PAST-3SG

(15)では述部に自動詞が現れる文である. (15a)では与格, (15b)と(15c)では奪格が用いられている.

(15a)では, 話し手との位置関係によって補助動詞 *kel-/bor-*のどちらかが選択される. コンサルタントによると, 話し手が学校にいる場合は *kel-*, 話し手が学校にいない場合は *bor-*が選択される. この場合, *yet-di-ø*「到着した」はあまり使わず, (15a)のように補助動詞を用いる, との指摘を得た.

【感覚1】

(16) a. 彼はお腹を空かしている.

U-ning qorn-i och.
 3SG-GEN stomach-3SG.POSS hungry

b. 彼は喉が渴いている.

i. *U chanqa-gan-φ.*
 3SG become.thirsty-PRF-3SG

ii. *U-ning tomog^ʻ-i qaqsha-gan.*
 3SG.POSS-GEN throat-3SG.POSS dry.up-PRF-3SG

【感覚 2】

(17) a. 私は寒い.

Men sovuq qot-yap-man
 1SG cold harden-PROG-1SG

b. 今日は寒い.

Bugun sovuq.
 today cold

(16)の場合、主語が身体部位、述部が形容詞である。ただし、(16b)「のどが渴く」は動詞 *chanqa-*で表すことが可能である。

(17a)のように、*sovuq*「寒い」の場合、主語が感覚主体である場合は *sovuq qot-*「寒く感じる」を用いなければならない。**Men sovuqman* (lit. 私は寒い) は非文である。

【(社会的) 相互行為 1】

(18) a. 私は彼を手伝った／助けた.

Men un-ga yordam ber-di-m.
 1SG 3SG-DAT help give-PAST-1SG

b. 私は彼がそれを運ぶのを手伝った.

Men un-ga ana u narsa-ni tasi-sh-da yordam ber-di-m.
 1sg 3sg-DAT there that thing-ACC carry-VN-LOC help give-PAST-1SG

(18a)と(18b)では「私が彼に助けを与えた。」というように解釈できる。(18b)のように、

助ける動作が表される場合、その動作は「動名詞+処格」で表される。

【(社会的) 相互行為 2 (言語行動)】

(19) a. 私はその理由を彼に訊いた。

Men u-ning sabab-i-ni u-ndan so'ra-di-m
 1SG that-GEN reason-3SG.POSS-ACC 3SG-ABL ask-PAST-1SG

b. 私はそのことを彼に話した。

Men u gap-ni un-ga {ayt-di-m/ gapir-di-m}.
 1SG that talk-ACC 3SG-DAT say-PAST-1SG talk-PAST-1SG

(19a) *so'ra*-「尋ねる」の場合、尋ねる内容は対格で、相手は奪格で表される。(19b) *ayt/gapir*-「言う／話す」では話す内容は対格で、話す相手は与格で表される。

【再帰・相互】

(20) 私は彼に会った。

- i. *Men u-ni uchrat-di-m.*
 1SG 3SG-ACC meet-PAST-1SG
- ii. *Men u bilan uchrash-di-m*
 1SG 3SG with meet-PAST-1SG

(20)では、動作主と対象の意図性によって表現が分かれる。

つまり動作主と対象に意図性がなく、「突然あるいは偶然彼に会った」ということを表す場合、i.のように対格+*uchrat*-が用いられる。*uchra-t*-は*uchra*-に他動詞化接辞 *-t* が付されたものと分析することが可能である。

これに対し、動作主と対象に意図性があり、「待ち合わせて彼に会った」ことを表す場合、ii.のように後置詞 *bilan*+*uchrash*-が用いられる。この*uchrash*-は相互態接辞 *-sh* が付されたものと分析することが可能である。

3. まとめ

まず 20 の例文の格配列と特記事項を表 3 にまとめる。その表を参照しながら他動詞

的な格配列を持たない例について、Malchukov(2005: 113)で提案された意味領域地図 (semantic map) に照らし合わせる。最後に、角田(1991)の反例となりうる(3)の用例について述べる。

表3を見ると、主格-対格以外が現れる用例は【感情】(9b)(10)から【関係】【移動】(15)、【感覚】(16)(17)、【相互行為】(18)(19)までである。これら全ての例で典型的な他動詞的格配列(主格-対格)は見られない(ただし【能力1】(13 ii.)では「～を知る」という対格を用いた構文で「可能」を表す)。以下に引用したMalchukov(2005: 113)で提案された意味領域地図では、【感情】【移動】【感覚】【相互行為】は右端の自動詞に比較的近い関係にある。Malchukov(2005)では【関係】に関しては言及がない。

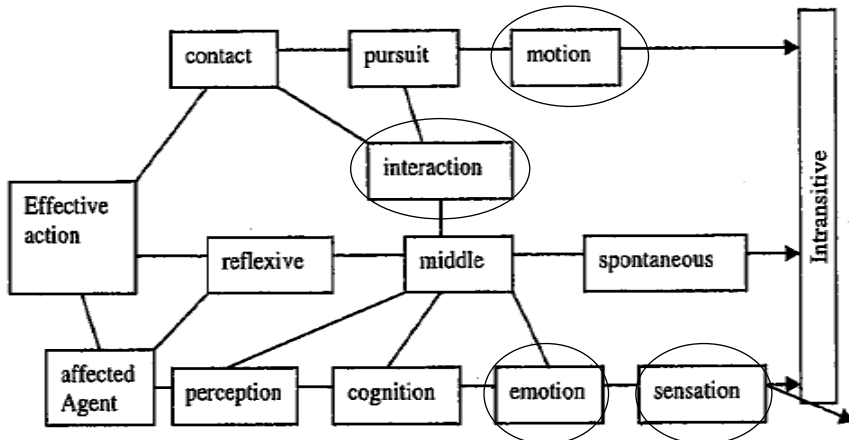


Figure 2: A Comprehensive semantic map for transitivity splits.

(Malchukov 2005: 113, 丸は筆者が付した)

表 3: 本アンケートにおけるウズベク語の格配列 (例文番号順)

	例文番号	格	特記事項
【直接影響・変化】	1	主-対	
【直接影響・無変化】	2	a, b	主-対
		c, d	主-与 dは補助動詞有
【知覚 2A vs. 2B】	3	a, c	自動詞
		b, d	主-対
【発見・獲得・生産】	4	主-対	
【追及】	5	主-対	
【知識 1】	6	主-対	
【知識 2】	7	a	名詞述語文
		b	主-対
【感情 1】	8	主-対	
【感情 2】	9	a	主-対
		b	与-主
【感情 3】	10	a	「怒りが出た」
		b	主-奪
【関係 1】	11	a, b	bは存在文
【関係 2】	12	a	名詞述語文
		b	主-主
【能力 1】	13	i.	補助動詞有
		ii.	主-対 「知る」文法化
【能力 2】	14	a	i.
			ii.
		b	補助動詞有
【移動】	15	a	主-与
		b, c	主-奪
【感覚 1】	16	a	形容詞文
		b	動詞文
【感覚 2】	17		aは定型表現
【相互行為 1】	18	主-与	
【相互行為 2】	19	a	主-奪
		b	主-与
【再帰・相互】	20	主-対	

最後に、角田(2009)の反例となりうる(3)の用例について述べる。角田(2009: 103-104)は see, hear (本稿の用例で言えばそれぞれ(3a)と(3c)) は look, listen ((3b)と(3d)) よりも対象に及ぶ度合いが高いとしている。さらに、角田(2009: 103)は、see は対象の映像をすでに捉えてしまった状態を指し、一方 look は対象の映像を捉えようとする努力を指す、と述べている。つまり see, hear は look, listen よりも他動性が高いと考えられている。しかし、ウズベク語では自動詞文として(3a)と(3c)が実現している。

表 4: 二項述語階層

類	1		2		3	4	5	6	7
意味	直接影響		知覚		追求	知識	感情	関係	能力
下位類	1A	1B	2A	2B					
意味	変化	無変化							
例	殺す, 壊す	叩く, 蹴る	see, hear	look, listen	待つ, 探す	知る, わかる	愛す, 惚れる	持つ, ある	できる, 得意,

(角田 2009: 101, 例を一部割愛)

以下では、まず(3)の用例を再検討する。次に Malchukov(2005: 87)での議論について検討する。その議論とは、ある言語では知覚動詞がより他動性の低い認識・感情動詞と同じクラスに属する場合がある、という議論である。

まず、(3a)の英文をウズベク語に直接訳してもらった。さらに、(3a')の see を look at に変えて訳してもらおうと以下のようなになった。

(3a') i. I see some people there.

Men u yer-da bir nechta odam-lar-ni ko'r-yap-man.

1SG that place-LOC one how.many person-PL-ACC see-PROG-1SG

ii. I look at some people there.

Men u yer-dagi bir nechta odam-lar-ga qara-yap-man.

1SG that place-ADJLZ one how.many person-PL-DAT look-PROG-1SG.

やはり角田(2009: 103)の記述どおりになっている。see にあたる *ko'r* は対格を取っている。それに対し、look at にあたる *qara* は与格を取っている。Waterson(1980: 59, 160)にも、*ko'r* は “To see”, *qara* は “To look at” という訳があてられている。

ただし、次の用例からもわかるように、*eshit* は hear/listen どちらも表すようである (Waterson 1980: 150)。

(3c') I heard/listen to somebody cry out.

Men kimdir baqir-gan-i-ni eshit-di-m.
 1SG somebody cry.out-PTCP.PAST-3SG.POSS-ACC heard/listen-1SG

以上より、ウズベク語の *ko'r* ‘see’ と *qara* ‘look at’ もやはり角田(2009: 103)の記述と同じような格をとることが明らかとなった。ただし、*eshit* は hear と listen のような違いはない。

次に Malchukov(2005: 87)による議論について検討する。Malchukov(2005: 87)によると、ある言語では Tsunoda(1985)で示された「知覚」動詞¹が Malchukov(2005)の言う認識動詞・感情動詞と同じクラスに属しているものとして扱うことができるようだ。

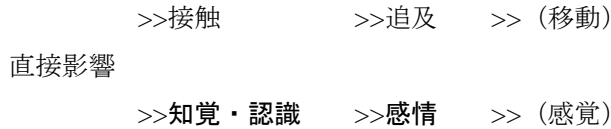


図 1: Malchukov(2005)で示された階層

「知覚」動詞が認識動詞・感情動詞と同じクラスに属する言語の一つとして日本語が挙げられている。

Malchukov(2005: 87)によると、次の用例に見られるように、他動詞的パターンは注意深い(attentive)知覚に見られる。自動詞的パターンは非活動的(inactive)な知覚に見られ、DAT-NOM のパターンをとる。

¹ 表 4 で示されている「知覚」動詞と同じものを指すと考えられる。

(21)²(わたしは)黑板を見た。 (Jacobson 1992: 30-31)

(22) (わたしに)黑板が見えた。 (Jacobson 1992: 30-31)

感情述語も DAT-NOM のパターンをとる。

(23) マミに (は) ハタ先生が恐ろしい (そうだ)。 (Shibatani 2001: 312)

つまり(22)は感情述語と同じクラスに属していると考えられる。

ウズベク語でも非活動的な知覚に見られる自動詞のパターンが感情動詞にも見られるであろうか。以下に非活動的な知覚動詞の例 (3a), (3c)を再掲する。

(3) a. あそこに人が数人見える。 /I see some people there.

Ana u yer-da bir nechta odam-lar ko'r-in-yap-ti.
there that place-LOC one one person-PL show-PASS-PROG-3SG

c. 誰かが叫んだのが聞こえた。 /I heard somebody cry out.

Kimdir baqir-gan-i eshit-il-di-ø.
who yell-PTCP.PAST-3sg hear-PASS-PAST-3SG

(3)の例では知覚者は現れていない。以下の(24)を見ると与格をとることがわかる。

(24) *ya'ni o'z-im-ga ham ko'r-in-ma-yap-ti rasm-lar-im.*
that.is REFL-1SG.POSS-DAT also show-PASS-NEG-PROP-3SG picture-PL-1SG.POSS

「つまり私自身にも見えない、私の絵が。」

(<http://pazanda.uz/forum/index.php?topic=451.10;wap2>)

次に感情動詞の例 (10b)を再掲する。ここで着目したいのが与格-主格の格配列が現れるかどうかという点である。

² (21)-(23)は Malchukov(2005: 87)に挙げられている例文である。

(10) b. 彼は犬が恐い.

U it-dan qo'rq-a-di.

3SG dog-ABL fear-NPST-3SG

少なくとも(10b)からは、与格-主格の格配列を取るわけではないことがわかる³。つまり、ウズベク語では知覚動詞が認識動詞・感情動詞と同じクラスに属していないと言えそうである。なお、表3を見ると、(10b)と同じような主格-奪格の格配列は【移動】(15b)、(15c)と【相互行為】(19a)に見られる。より他動詞らしくない格配列が予想される箇所では、主格-奪格の格配列が現れている。

したがって、ウズベク語においては、知覚動詞が認識・感情動詞と同じクラスに入ることはないようだ。

本節後半部分での議論をまとめると次のようになる。

問い：(3a)と(3c)は角田(1985, 2009)の反例となりうるか？

答え：ならない

理由：(3a')のように英語からウズベク語に訳すと、*see* と *look at* のように異なる格枠組みが表れる。ただし、*hear/listen to* の場合はそのような格枠組みは表れない。

さらに、知覚動詞が認識動詞・感情動詞と同じクラスに属するかどうかについても検討したところ、同じクラスには属しないと結論付けた。

ただし、(3a)と(3c)で自動詞パターンが現れたのが、単に日本語からの翻訳によるものなのかは再検討を要する。

³ 【感情2】(9b)は与格-主格の格配列が見られる。しかし、述語 *kerak* 「必要である」が感情を表すとは考えられないので、ここでの議論には含めない。

略号一覧

-		接辞境界	NPST	non-past	非過去
=		接語境界	PAST	past	過去
1, 2, 3		各 1, 2, 3 人称	PL	plural	複数
ABL	ablative	奪格	POSS	possessive	所有
ACC	accusative	対格	PRF	perfect	完了
CVB	converb	副動詞	PROG	progressive	現在進行
DAT	dative	与格	PRS	present	現在
FUT	future	未来	PTCP	participle	形動詞
GEN	genitive	属格	Q	question marker	疑問標識
LOC	locative	位格	SG	singular	単数
NEG	negative	否定	VN	verbal noun	動名詞

参考文献

- Bodrogligeti, András J. E. 2003. *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: LINCOM EUROPA.
- Boeschoten, Hendrik. 1998. Uzbek. Johanson, Lars and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 357–78. London, New York: Routledge.
- Ibrahim, Ablahat. 1995. *Meaning and usage of compound verbs in modern Uighur and Uzbek*. Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Jacobsen, W. M. 1992. *The transitive structure of events in Japanese*. Tokyo: Kurosio.
- Kononov, A. N. 1960. *Grammatika sovremennogo uzbekskogo jazyka*. Moskwa, Leningrad: Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR.
- Malchukov, A. L. 2005. Case pattern splits, verb types and construction competition. In M. Amberber and H. de Hoop (eds.), *Competition and variation in natural languages: The case for case*, 73-117. London and New York: Elsevier.
- Shibatani, Masayoshi 2001. Non-canonical constructions in Japanese. In: A. Aikhenvald, R.M.W. Dixon and Masayuki Onishi. *Non-canonical Marking of Subjects and Objects*. 307-355. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Sjoberg, F. Andrée. 1963. *Uzbek Structural Grammar*. Uralic and Altaic Series, Vol.18 Indiana University, Bloomington.

庄垣内正弘. 1988. 「ウズベク語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典（第1巻世界言語編 上）』829-833. 東京：三省堂

Tsunoda, T. 1985. Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics*, 21. 385-396.

角田太作. 2009. 『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語 改訂版』東京：くろしお出版

Waterson, Natalie. 1980. *Uzbek-English Dictionary*. Oxford: Oxford University press.